



しんぶん
に
あ
ら
は
し
め
る

中村俊定文庫
文庫 18
312





つれく草二十一段



美のよひ月をばりて

なほさむきあは

人月をばりて

まのいあ

まのいあ

ほら山崎峰よりまきの水雷
くもんかん経る後名如入く
初めくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
五里籠尔底るくくくく内
銅網おけくくくくくく
出給月の夜中鳴渡のくく
言次のくくくくくくく

救入のくくくくくく
木母寺くくくくくく
雨のくくくくくく
歌乃洞度ふ山刺英く
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
御田系乃くくくく

前よりいふ言の勸めりよとに
ありとありはれ中の世のま
か風の流れしそとて教ふに
馬の上ふて 鴨も鴨との
葉乃よりゆり人れ教ふに
宮隠の戸にゆく時より
朝の月ふりしそとて教ふに
わ~~~~ 岐屋に岐ははれん

互り挽の掬い端ふ百年忌
小使むよくはるる樹子の林
晴しもうらむしはれまふる
う~~~~しはく 石船なる
葉乃よりゆり人れ教ふに
し~~~~はるるまきれ上

第二

買明

白雲山... 月入... 松茸... 飛脚... 山... 教...

佛壇も福くこの上赤らりの儘
り山、昔のこゝへ鞆つほ
あつてもや光陰と夫とあつて
去くとも思ふゆゑあつて
山王城下もこゝへはるかに
獨りかゝるやうにふり
まゆと裏くぬきまの可
ま帰らんこの路乃ち浪

このあふ情素物不あつて
あつて月夜の樹へこゝへ
昔のあつて思ふゆゑ
うまに思ふと帰る／＼金
翔く伏見の船は流しと
こ風冬／＼の中もあつて
一二本程流しと寺の松
ふふとまてと時雨

上京へ縁を付く先は柄
うき草も修能くこ
次水と若水の後又あし
てら〜道に即興三味
楽人の歌い今年も休後子
妻も草子に流る代り
秋もあつたあつたあつたあ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

持待歌のうき草も修能くこ
十二。うき草も修能くこ
於この後のうき草も修能くこ
あつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあ

第三

故一

薩郊地を流す水よきの配り
一山崩れ宛月あそびぬき
里ぬきの興ふ菊の宿あり
下流の下戸を流す川から
そも初少船の上を渡り初
月あかりとも交時を離れ

松へく内乃なるも如く自在
 難改免して老るゝかゝ野の如
 雑役ふ女の信も不便也
 仰るありけしむ修村の様
 心も河と比て度の仲並に
 能くもあし乃能く穿て鑑
 水仙見月ちりの風自あや
 ち如くあう割る尺八

居みくとしつゝはははははは
 廿九りあつた山とあつたあ
 草鞠矢別あつたと切つてい
 とさういふ海の境柳者あつ
 ち保し世縁とらうじの如く
 老翁ふら尼の甥を歴く
 ちがはるゝ^辨の如くあつたあ
 大概月も回つたあつた海

金屏子次信也乃負
屋中ハ伊達あるも芳飯
灯次燈を懐りて河内志の周
上る上坂の名は燈帳向
握の雲縹々うらと標と合
於り由りなる婦の帯とせ
俾多しと睡とも清しと
錫と西瓜の柄と善やく

宮守の少少はと昔の巻とら
池をり半紙洗ひせし糸
暖むい乃側と枕をあらふ
若の物として琴箱の反り
枝深き葉子同じぬるえ
穀貝の力と三月乃苞

第四

黒露

宿川起つ爲城露の極うふ
聖川のぬら種一越ぬ月
お年責如二境の中亦お葉々
ま開とりこも縁つけく唯
酒けくあひいさあ紙捨らに
そり教らる學を母のそ

うし物せの「護」の土ほら
渉半うううにの娘は
州うの山ては晩を片ひ
大佛の栴町は道具屋
ひるふ草はひるは路の歌
日雇冬あは粉の母は栴
流るるに風乃宿の月
襖の繪ささ栴戸り雪

とてうこの古栴凡の山女種
産流見つけるをゆる大
世の母は学新とをらあはら
美山かく草の物さしな
十渡し場とくははるの歌
雪隠も相は 栴井
こいつら、津のそめははる
裡と仰る 雪さ中夜栴

おのより如縁いふいふさし
ふれハツのちる高ハ川浪
碧毛むして世をよみか解い
あ孫も妹とよけ年乃君
事少くも廿ハ心経かして
一日もいこる言はる市
心より向し社頭の月如澄むら
嵐もさし一木の如風

夕霞映崎集如ささしひか
七重の宮の林もいれ
小坂力く抱娘賣しあさ
口を山の端りも紅れ
お母一海も夏も橋もあ
やし、返し一峰の細さ

第五

六

空を渡る鳥の如く
海を渡る魚の如く
空を渡る鳥の如く
海を渡る魚の如く
空を渡る鳥の如く
海を渡る魚の如く
空を渡る鳥の如く
海を渡る魚の如く
空を渡る鳥の如く
海を渡る魚の如く

開きしは 唯 忍びしと 思ふを
涙 流し 出れ 山 雲の 形 跡
何 處に あり どの 山 雲の 形 跡
何 處に あり どの 山 雲の 形 跡
常 盤 本 たり 何 處に あり どの 山 雲の 形 跡
ゆ 宛 とも あり どの 山 雲の 形 跡
惟 光 山 雲の 形 跡 なる 月
次 之 乃 中 後 の 形 跡 なる 月

世 是 けり こと 網と あり 思ふ
あ こと の 形 跡 なる 月 の 形 跡
い かな なる 形 跡 の 形 跡 なる 月
何 處に あり どの 山 雲の 形 跡
⁺ 哉 ツ なる 形 跡 の 形 跡 なる 月
あ 海 なる 形 跡 の 形 跡 なる 月
あ 雲 なる 形 跡 の 形 跡 なる 月
あ 雲 なる 形 跡 の 形 跡 なる 月

磯寺如の母の樹の影と
少頃時形くは乃世の中
月多んをあつたは果は
石をさふりては
ふりては枝よ一鳴
母の常と聲は
あつたは
石坂く急て
あつたは

藤輪の母は後
佛形もあつたは
あつたは
あつたは
あつたは
あつたは
あつたは
あつたは

第六

釋

祇徳

十ふふとくおの身や風お前
 の輪乃ち紅山溪の月
 豆畑を兔より荒る極小く
 茶のこぼしお取らんとて
 ちこらお茶おのこし茶名のち
 しくれこつおさくき海おも

一左 右 とも とも 印 妙 蓮 の 事
 神 の 名 と とも とも とも とも とも とも
 似 たり とも とも とも とも とも とも
 ち とも とも とも とも とも とも
 店 名 と とも とも とも とも とも とも
 と とも とも とも とも とも とも
 とも とも とも とも とも とも とも

笑 あり とも とも とも とも とも とも
 家 乃 とも とも とも とも とも とも
 雨 と とも とも とも とも とも とも
 雙 とも とも とも とも とも とも
 十 とも とも とも とも とも とも
 け とも とも とも とも とも とも
 係 とも とも とも とも とも とも
 瀧 とも とも とも とも とも とも
 根 とも とも とも とも とも とも

ふ磑の頃よふとらなむらし
書く苦うらゝ、筆の紙丈
おゝにゆれぬさあわら
ふさふさの世あはれごと
十億とせぬ寺願のたぐれて
蘇摩のぬくこけらゆきか
空たふさみふさき一筆量
酒のあとにけりき餅菓子

曇ては右教のらゝぬ西あふり
お出の澄々今如 松本
馬くは喧嘩を喰らうとて
水やほらん ことかぬらん
丹とらふさふさの草の葎
群中のあゝとららん

初

寬延四年八月閑板之

萬屋清兵衛板



萬屋

